

國學院大學學術情報リポジトリ

教員養成課程の学生に対する読譜の指導について：
読譜力を獲得するための実践的手法(3)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 真琴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001288

教員養成課程の学生に対する読譜の指導について

— 読譜力を獲得するための実践的手法 3 —

高山 真琴

【要旨】

教員養成課程の学生が読譜力を獲得するための実践的手法として、筆者はこれまで、拍子を理解しリズムを捉えるための基礎的トレーニング方法と、音高の推移を把握するための基礎的トレーニング方法を考案し、授業実践の中でそれらの有用性を検証しつつ、さらなるトレーニング手法を模索してきた。今回提案する読譜力獲得のための手法は、「ソルフェージュ的トレーニングを導入し、記譜することによって楽譜の構造を理解し、その理解を読譜に反映させていく」というものである。(1) 音符を用いずにリズムを表記するトレーニング、(2) 音符を用いてリズムを表記するトレーニング、(3) 五線に音符を表記するトレーニング、(4) 楽曲を用いた読譜トレーニング、といった、段階的に構築したトレーニングの授業における実践方法を具体的に示しながら、〈聴音→書き取り〉によって学生にもたらされる楽譜構造についての理解が、読譜力へどのように反映していくかについて考察する。

【キーワード】

楽譜・構造・聴く・歌う・書く・読む

はじめに

教員養成課程の学生が読譜力を獲得するための実践的指導法として、筆者は、拍子を理解しリズムを捉えるための基礎的トレーニング方法(2012)^{注1}と音高の推移を把握するための基礎的トレーニング方法(2013)^{注2}について提言してきた。授業実践において、読譜に苦手意識を持つ学生に対してはまず、「楽譜とは音高と音価を示す音符の組み合わせによって成立している音楽を可視化して表したもの」という楽譜の構造についての理解を促した上で、上述のリズムと音高の推移の把握を目的としたトレーニングを行ってきた。視覚で捉えたものを聴覚化するための基礎的トレーニングと課題曲を用いての応用的トレーニングの組み合わせにより、音の推移の読み取り方は学生に理解されるようになったが、この理解が学生にさらに定着し、読譜力として醸成していくために、新たな授業実践として「聴音をして楽譜を書く」作業を学生に課すこととした。正しく楽譜が書けるということは、聴き取った音の音高と各音の音価の比率とを五線上に正確に記せるということである。すなわち、聴覚で捉えた音を視覚的に表す記譜法の理解を以て初めて正しい記譜が可能となると言える。自ら楽譜を書くことで学生は音楽の表され方を理解する。その

理解は、音楽を顕在化した楽譜を読む行為に必ずや反映されるものと考ええる。

本論では、〈書くことによる楽譜構造の理解〉のための授業実践例を示しながら、教員養成課程の学生に対する読譜力の醸成に繋がる指導法について考察する。

知識と体験を読譜力に結びつける実践的手法〈書くことによる楽譜構造の理解〉

呉(1987)^{注3}は、その著『ソルフェージュからピアノへ～4・5歳児のピアノ指導～』の中で、子どもに音楽教育を施すに際しては、ピアノ等の楽器演奏の習得を始める前に、「音符（音の高さ）やリズムの譜読みと、歌をドレミで唱ったり、易しい音当てなどをして音感をつける練習」を課し、ソルフェージュ教育を通して楽譜を読めるようにすることを提唱している。さらに呉(前掲書)は、ソルフェージュ教育を始める前段階として、「よく歌を唱う」ことを必須事項として掲げ、「唱うことによって、音程、リズム、フレーズの感じが自然にわかるようになり、さらに、いろいろな歌をたくさん唱うようになってから、それらをドレミに置き換えていくことでソルフェージュの勉強に入ることが望ましい」(筆者要約)^{注4}とし、ソルフェージュ教育への導入期での歌うという音楽経験の大切さを説いている。この、呉による音楽教育開始時におけるソルフェージュ指導法は、教員養成課程の学生に対しても、楽譜を読むことを前提とした音体験による音感育成の一方法として、活用に値するものと考ええる。学生は、聴覚で捉えた音を歌うことやリズム打ちすることを十分に経験しながら、視覚化すること、つまり記譜することを併せて行うことにより、楽譜の成り立ちについての理解を深めると同時に、その楽譜を、楽譜の構造を理解した楽譜の書き手の視点を以て読み進められるようになるのではないかと考える。

以上を論拠に授業実践として行った記譜のための基礎的トレーニングを以下に列挙する。

(1) 音符を用いずにリズムを表記するトレーニング（図1参照）

音符の成り立ちの理解を促すために、聴き取ったリズムを図示することを以下の要領で試みる。

演習課題：長音と短音を組み合わせて長音2つ分の音価のリズムを作り、図示する。

予備練習：長短の音価の組み合わせによるリズムを聴き取る。

- ・教師は長音の音価を1拍とし、「1、2、1、2」とカウントした後、譜例1に記されている各小節のリズムを2回ずつ叩く。
- ・学生は教師の叩くリズムを打ち返す
- ・短音が長音を二分割していることを学生は体感する

課題実践：学生は6グループに分かれ、グループ毎に長音と短音を組み合わせて長音2つ分の音価のリズムを作り、作ったリズムを一グループ一つずつホワイトボードに二色のマグネットを用いて図示する。リズムは他のグループの示した以外のリズムを示すものとする。

〔条件〕

1. 赤いマグネット(図1では□)は長音、緑のマグネット(図1では△)は短音を表す。

2. 短音は長音の二分の一の音価である。

〔準備〕

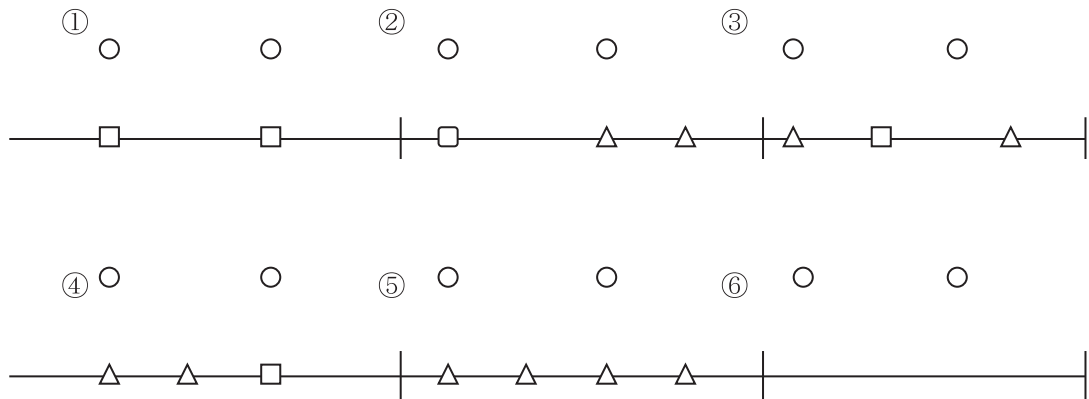
ホワイトボードには3小節に分割した直線を2本用意し、各小節に番号と、各拍の位置を示す○を書き込んでおく。(図1 参照)

課題検証：・各グループ、作ったリズムを一つずつホワイトボードに二色のマグネットを用いて示していく。

- ・長音と短音を用いてできる長音2つ分の音価のリズムは5種類できることが分かる。
- ・第6番目のグループは、マグネットが長音と短音の音価の比率通りに付されているかを確認し、必要とあれば正しい比率の位置にマグネットを付け直す。(図1 参照)
- ・マグネットにより示されたりズムを手で打つ。
- ・この音価の表し方が、記譜に於けるリズム表記法の原則であることを学生に示す。

学生の実態：学生は、音符を用いずとも、音価の比率が図1のように示されればリズムを視覚的に把握できることに気付いた。また、リズムをリズムとして把握するには、等間隔で記された拍の動きを認識しなければならないことも気付いた。

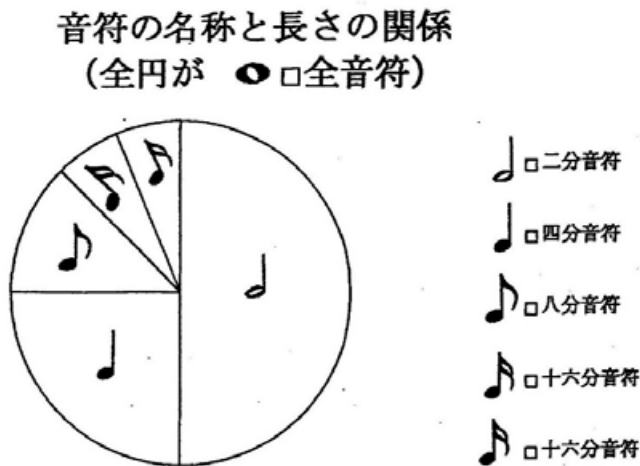
図1



譜例 1



図2



(2) 音符を用いてリズムを表記するトレーニング

演習課題：図1で表したリズムに、長音には四分音符を、短音には八分音符を当てはめてリズム譜を作成する。

予備練習：・音符の名称は、全音符の音価を一とした場合の各音符の音価の割合をそのまま用いたものであることを、図2を用いて示す。

- ・図1にある長音に各音符を当てはめると短音の音符は何になるかを学生に問い、長音に対し短音は長音を二分割した音価の音符となることを理解させる。

課題実践：「四分音符と八分音符を用いて四分音符二つの長さになるリズムを作りましょう」

- ・図1に示した5種類のリズムを各音符の音価の比率に忠実に記す。

〔準備〕

- ・四分音符と八分音符の音価の割合を正確にリズム譜として記せるよう、1小節内に音符を記す位置の参考になるよう八分音符の刻みの位置に○印を施した課題譜を用意する。(図3参照)
- ・課題番号横の()には、予め学生に解答させた図1に示されたリズムを、四分音符と八分音符で表す場合の音符の並び(譜例1参照)を記しておく。
- ・拍子記号の説明をする。

課題検証：・机間指導しながら、各音符が図4のように正確な割合で配置されているか、学生の解答をチェックする。

学生の実態：学生は、小節内に記す音符の位置、及び音符の種類共正確に書き記すことが出来た。それは、(1)音符を用いずにリズムを表記するトレーニングを既習していることと、

譜面上に音符を記す位置確認の○印が記されていたことに起因すると考える。楽譜の成り立ちの基本を知り、自らその基本に則って記譜することが可能となった学生は、課題相当のリズムを有する楽曲であれば、初見であっても記されているリズムを、正確に把握することができるようになった。トレーニングの始めの段階では、限定した2種類の音符（四分音符＋八分音符、八分音符＋十六分音符等）で音価の割合を十分に体験することが必要であるが、学生の実態に応じて、聴音する音符の種類を3種類、4種類と段階的に増やし、〈聴く→書く〉のトレーニングを継続的に行うことで、学生のリズム感の育成を図れるものと思料する。

図3 リズム譜作成課題

①（四分音符・四分音符）

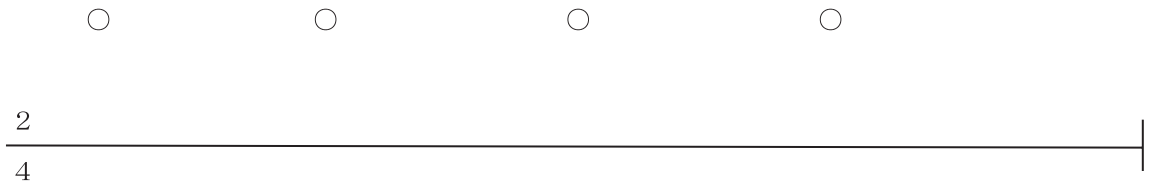
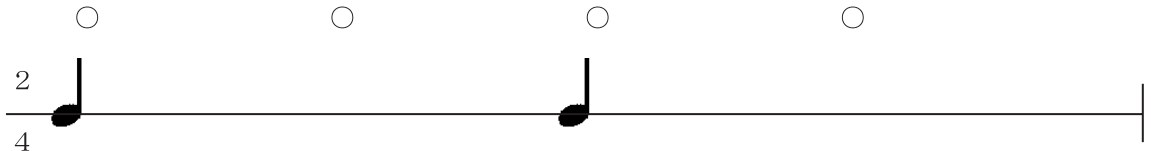


図4 リズム譜作成課題解答

①（四分音符・四分音符）



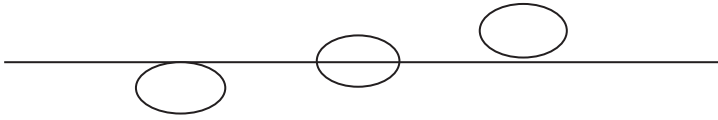
（3）五線に音符を表記するトレーニング

演習課題：聴き取った音を五線に記す。

予備練習：1. ハ調長音階を固定ドで歌う。階名唱に移行していくことを考え、ハ調長音階の音程構造を、学生は歌うことで正しく認識する。この時点では、学生の思考の混乱を避ける意味で階名と音名の区別はまだ示さず、固定ド（実音名）で歌わせることとする。

2. 一本線を用いて示される3つの音を教師は順不同に指し示し、学生はその音を階名で歌う。ここでも階名という言葉は用いず、「一番下の音をドとしたら」という言い方で、用いる3つの音を示す（図5、および例1参照）。ドレミが十分に歌えた後、例2に示した3音についても、同様の練習を行う。

図 5



例 1) ドレミ、ドミレ、レドミ、レミド、ミレド、ミドレ

例 2) レミファ、ミファソ、ファソラ、ソラシ、ラシド シドレ

3. ドレミの 3 音を教師は順不同にピアノで弾き、学生は弾かれた音を歌う。
4. 書き取り聴音の準備として、ト音記号、ヘ音記号、二分音符、四分音符、八分音符の書き方練習を学生に課す。
5. 音部記号の意味を説明した後、ハ調長音階をト音記号と全音符を用いて書く練習を学生に課す。
6. 譜例 3 の課題から、聴音課題の条件に該当する課題を何題か、学生に聴唱させる。

課題実践：「課題を聴き取り五線に正しく記しましょう」

- 聴音準備として、五線にト音記号、拍子記号、小節線、終止線を学生に書かせる。
（譜例 2 参照）
- 全ての課題は以下の条件の下で書き取っていくことを学生に示す。
- ハ長調、四分の二拍子、4 小節
- 聴き取る音は一点ハ、一点ニ、一点ホの 3 音
- 使われる音符は二分音符、四分音符、八分音符
- 開始音は一点ハ
- 課題演奏回数は 3 回から 5 回（学生の聴き取り状況をみて判断する）

課題検証：• 聴音課題を奏した後、机間指導しながら、課題の音が正しい高さ、正しい音符、小節内の正しい位置に記されているかをチェックする。

• チェックし終えた後、聴き取った課題を固定ドで歌う。

譜例 2

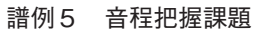


譜例 3

聴音課題・ハ長調

The image displays ten staves of musical notation, numbered 1 through 10, arranged vertically. Each staff begins with a treble clef and a key signature of one sharp (F#), indicating the key of D major. The notation consists of eighth and quarter notes, with some staves featuring beamed eighth notes. The exercises are designed for a listening exercise in C major, as indicated by the title. The notes are as follows:

- Staff 1: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 2: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 3: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 4: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 5: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 6: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 7: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 8: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 9: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.
- Staff 10: C4, D4, E4, F#4, G4, A4, B4, C5.



目的としたトレーニングのためのものであり、課題に対して学生が抵抗感無く取り組めるよう配慮することが望ましい。

書くことから読むことの力を育成するためのトレーニングとして行われる聴音課題の音域については、徐々に拡張していくことが望ましい。譜例4の視唱課題は、加線で表される音や3度離れた音を素早く読み取るトレーニングとして有効な課題である。また、譜例5の音程把握課題は、1度から順次拡張していく音程を視覚的に素早く読み取るトレーニングとして活用できる。いずれの課題も、教師がそれを学生に用いる目的を明確に持ち、教材化して、初めて課題としての有効性を発揮できるものと思料する。

（4）楽曲を用いた読譜トレーニング

記譜の基礎的トレーニングを体験した学生に、応用課題として、3音から4音でできた課題を固定ドで歌うことを課す。（譜例6、譜例7、譜例8参照）

演習課題：初見視唱する。

予備練習：課題曲を歌詞で歌う。

課題実践：1.「次の曲を実音名（固定ド）で歌いましょう」

2.「次の曲を一人がワンフレーズ（4小節）ずつ実音名で歌い、リレー式に歌い繋ぎましょう」

課題検証：・ワンフレーズずつリレー式で歌う際、音高（音名）、及びリズムが正しく掴めているかを個別にチェックする。

・リレー式に歌い繋ぐ際、音楽の流れを途切らせないタイミングで歌い始められるかをチェックする。

学生の実態：大多数の学生は、正しく旋律を実音名で歌うことが出来た。（3）五線に音符を標記するトレーニング・予備練習1、及び予備練習2を丁寧に行うこと等、本課題に取り組む以前のトレーニングを、入念に学生に課したことで、楽譜に書かれている音と実際の音とが学生の中で結びついたものと思料する。また、課題曲には、遊び歌やわらべ歌という学生の耳に馴染みがあるものを選曲したことで、学生が、音の並びのイメージを持ち易かったことも一因として挙げられよう。

譜例6 《なべなべそこぬけ》^{注5}



譜例7 《ほ、ほ、ほたるこい》^{注6}

ほ ほ ほ たる こい あっ ち の み ず は
 7 こ ち の み ず は
 に が い ぞ ほ ほ ほ たる こい
 あ ま い ぞ

譜例8 《かごめかごめ》^{注7}

か ご め か ご め か ご の な か の と り ー は
 9
 い つ い つ で や ー る よ あ け の ば ん に
 17
 つ る と か め が す べ っ た う し ろ の し ょ う め ん だ ー れ

まとめ

読譜力について緒方(2010)^{注8}は、「五線譜に表された音楽情報を読み取ることができるという知的能力」と「音楽を楽譜から視覚的に捉えて、階名で歌唱したり楽器で演奏できる能力」のふたつの側面があるとしている。楽譜を音楽に起こす際のプロセスを言語化すると、〈視覚で捉えた音を音として聴覚的に変換し、演奏として表出する〉ということになろう。読譜力をもって行う読譜という行為は、楽譜に記された音楽情報を単に読み取るだけでなく、緒方の提言にもあるように、その情報を音楽に再生するまでを含むと言える。

本論で提示した読譜力を獲得するための実践的手法は、楽譜の構造を自ら楽譜を書くという行為を以て理解することが、楽譜を読む力の育成にも繋がるのではないかと、という視点から考案した。元来、楽譜というものは、聴覚情報である音楽を視覚情報として顕したものである。顕されたものの表し方を理解することは楽譜構造の理解に通じ、顕されたものを書き表すという行為は、音楽そのものを記譜により五線上に再現していくことである。この記譜という行為をトレーニングとして行う際、心掛けなければならぬことは、書き表す音楽を音楽の形で聴音し、その形を五線に記す過程を必ず踏むことである。〈聴覚で捉えた音を視覚的に変換し、楽譜として表出する〉

というプロセスは、楽譜を音楽に起こすプロセスを逆から辿ることに他ならない。楽譜を演奏に表出するための読譜力は、視覚から聴覚へ、聴覚から視覚へと、捉えた音楽を再生するトレーニングを繰り返すことで、その育成と定着が期待できるものである。音楽教育の初期の段階で行うべきソルフェージュ的トレーニングを教員養成課程の学生に施す意味はここにある。

読譜力を〈楽譜を、母語を読むように円滑に読め、歌に、演奏に表出できるようになる能力〉と改めて認識し、学生の読譜力の育成を図る手法と教材を今後も継続研究していく。

〔注〕

- 注1. 高山真琴「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について－読譜力を獲得するための実践的手法1－」
『國學院大學人間開発学研究』第4号 2012年
- 注2. 高山真琴「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について－読譜力を獲得するための実践的手法2－」
『國學院大學人間開発学研究』第5号 2013年
- 注3. 呉暁『ソルフェージュからピアノへ－4・5歳児のピアノ指導－』P.13
- 注4. 呉暁『ソルフェージュからピアノへ－4・5歳児のピアノ指導－』P.49
- 注5. 『わらべうたによる 合唱曲集－2－』P.2掲載の《なべなべそこぬけ》を筆者が編曲
- 注6. 『わらべうたによる 合唱曲集－2－』P.1掲載の《ほ、ほ、ほたるこい》を筆者が編曲
- 注7. 『わらべうたによる 合唱曲集－1－』P.9掲載の《かごめかごめ》を筆者が編曲
- 注8. 緒方満『読譜力という基礎的能力－小・中学校と一貫して育む学力－』P.10

〔参考文献〕

- ・緒方満『読譜力という基礎的能力－小・中学校と一貫して育む学力－』東京 教育芸術社
2010年 第1刷
- ・呉暁『ソルフェージュからピアノへ－4・5歳児のピアノ指導－』東京 音楽之友社
1991年 第6刷
- ・高山真琴「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について－読譜力を獲得するための実践的 手法1－」
『國學院大學人間開発学研究』第4号 2012年
- ・高山真琴「教員養成課程の学生に対する読譜の指導について－読譜力を獲得するための実践的手法2－」『國學院大學人間開発学研究』第5号 2013年
- ・本澤陽一『わらべうたによる 合唱曲集－1－』東京 東京わらべうた編 2007年
第2版
- ・本澤陽一『わらべうたによる 合唱曲集－2－』東京 東京わらべうた編 2010年
第1版

（たかやままこと 國學院大學人間開発学部初等教育学科准教授）